

11 + & 期同窓会

11期 森川 功

40周年記念行事のAコース医王山散策も、脱落者もなく無事終了し、続いて11期同窓会となった。

9月13日朝のミーティングで、何となく医王山と倉谷ハイキングという話になり、約30年ぶりにベルクハイムに行くことになった。今回は青柳一人の参加予定だったが、11期の偉大なる「いい加減さ」の御蔭で、小山、加藤、今村、森川が滑り込み参加。ドライブにはピッタリの人数となった。

駒帰で行動食を準備しようとしたが店がなく、あの吊橋もなく、近代的な橋から見下ろす谷の深さに驚くばかり。しかたなく行動食は井上家へのお土産になるはずの「伊勢の名物；赤福もち」とし（井上さん御免なさい。ただし、夫君了承済み）、非常用のパンを1個、記録用のカメラを持ってダムを出発した。

ダムを出てすぐ、優雅な筈の山行がブッシュ漕ぎに変わった。ふと思い出して見ると、メンバーの中に、学生時代、<ブッシュ>をこよなく愛した二人がいるではないか。いやだねえ。

「昔は、バイクで倉谷から肉の買い出しに行っていたものだ」と話していると、「自転車を通っ

た」と言う人もおり、さすがOBでも最大人員を擁する11期、人種は豊富である。

半分の行程を過ぎた所から草が刈ってあったが、倉谷の部落を過ぎてもベルクハイムへの登り口は見つからず、通り過ぎてしまった。看板は草の中、登り口は草ボウボウ。

小屋の前の草を刈り、小屋内を掃いて掃路に着く。（白井さん、信じられないなら、いつでも写真を持参します。御一報下さい。）ベルクハイムでうまい酒を飲むには、道路整備、特に草刈が必要。是非OB会費で、鎌と草刈機を購入して下さい。

11 + & 期総会に備えて、まず最初に湯湧近くの露天風呂で汗と疲れをとり、ノドの準備をし、服装を整えて、井上氏邸宅へ急行。

総会（宴会と言う人もいるが）には、三重でゴルフをやってきた杉森、三重・奈良県境の大台ヶ原と大峰山帰りの向さん（御免！両山とも百名山でした）、顔の色が極端なほど対象的な大出夫婦、井上家の令嬢・聖子ちゃんの計11名が参加した。ピアノとフルートの音楽会、及び宴会が2時まで続いた。勿論3名は図々しく、シュラフではなく、布団でお休み。



11加藤 11森川 11小山 11青柳 11井上（前列）



11井上 11小山 11杉森 11森川
11青柳

11加藤 11井上 12大出 11向 12大出

まさか…訃報に皆さんが絶句してしまいました。

11期総会もこれが5回目。(井上さん、いつもご迷惑をかけ、御馳走になっています。誰かが昼に5kg痩せ、夜に7kg太ったと嘆いていました。)次回も5年後開催予定ですので、是非参加して下さい。(井上さん、勝手言ってますみません。)

「今度は書いていただけますよね。先輩」節ちゃんの言葉にも貫祿というか、凄味が出てきたね!…スママセン!

事務局長大変と思いますが、気楽にやって下さい。新入生歓迎会時の同期ではないですか?何かあれば言って下さい。喜んで手伝わせてもらいます。

医王山での写真を同封します。適当に配ってして下さい。11期の写真も2枚入れておいたので、使えたらどうぞ。

次回、温泉でしごけるのを楽しみにしています。来年になったらトレーニングしなければ!

カップル誕生なら、ワンゲルは他の部よりも多いのではないかと思います(統計の裏付けなし)。カップルになったら女性の方が部から身を引いた(?)時代もあり、名簿で判明する以上に、ワンゲルがご縁になっての夫婦ワンゲルは誕生しています。ちなみに3期北さんの奥さんは、田村さんの妹さん。そんなご縁の場合もあります。

兄弟ワンゲルとなると、私の知る範囲では9期伊藤俊成さんと14期伊藤直和さん、16期立浪節子さん(途中退部)と20期犀川朋子さん、11期片田寛さんと15期片田さつきさん(たった3ヶ月。誘われた私の方が残りました。初めて一緒に覗いた部室で開口一番「赤地ィ!兄貴のシュラフ返せまん!」。並み居るおエラ方を卒倒させました。)がいます。

ところが、親子ワンゲルというのはこれまで登場しませんでした。まず、金大、そしてワンゲルとなると、これは親の思い入れでコントロールできることではありません。

しかししかし、とうとう登場したのです。

11期加藤忠好さんと息子43期加藤菜就君。名実ともにOBと現役の共催となった今回の40周年の、象徴ともいえるできごとでした。

菜就君にはプレッシャーがかからないようにと願っていますが、そんなことは分かっているながら入部したのだから、スゴイ！忠好先輩を越える大物になること間違いなし。

一世ワンダラーの方に原稿を迫りました。

11期 加藤 忠好

日暮れの早さと同時に、もう肌寒くなってきました。

先日は、貴女著の「石川県の山」をお送り頂き有り難うございます。返事を書く暇もなく読んでいます。そして、節ちゃんの行動力に感心しております。その行動力でもって、ご主人も大切にして下さい。

はたまたKUWV40周年記念山行を企画して頂き有り難うございました。懐かしい顔に出会え、非常に楽しい一時を過ごすことができました。学生時代にカモシカのようにであった私の体も、今やいつも25kgの脂肪を担ぐようでは、どうもいけません。今回参加しようと思ったのは、森川の誘いも大きな要因ですが、医王山、それも麓なら大丈夫だと思ったからです。坂道を歩いても30分だろうからと。

(丁寧な文章には慣れていないので、以下、である調にします)

しかし、参加については、個人的にもう一つひっかかる事があった。それは、「私とよく似た顔を持つ男」が同行するからだ。彼の方も自分の存在を意識、いや恐れている筈だ。何故なら私は、彼の弱点をあますことなく知っている人物だからだ。では私が優位であるかと言えば、自分の過去が暴かれるのではないかという不安があった。

別に暴かれるものがなくても、自分の青春時代に、無断で第三者が闯入する。それは財布の

中を覗かれた時の「へー、3740円しか持っていないの？」と自分の価値をその金額で判断された時のような、一種の嫌悪感がある。その心配がないように、私は主義として財布を持っていない。そんな小銭によってポケットに穴が空こうとも、男は主義に生きるのである。

(ここまで言い切ると、田村教の教祖様の顔が浮かんでくる。どうもイカン。ちなみに、田村氏も、私も、そして私とよく似た顔をもつ男も、同じ学科なのだ。)

その男の名は菜就(なづく)という。

命名は親の特権である。少子化の時代は特にそうである。彼が生まれた時、山の道標にちなんで「標(しるべ)」にしようという提案をした。しかし、父親の権威も虚しく、家族の猛反対にあった。「汁兵衛」のようで古臭いというのだ。

それでは「木偏」を「シ偏」に代えて、「漂」というのを考えた。しかも「ただよう」というのは、読み方も父親の「ただよし」と一字違いでなかなか良い。しかしこれも、どうも落ち着きがないように感ずるという理由で反対があった。特権の行使とは、実に責任を伴い、そして反対に遭うものだと痛感した。

そこで反対できないという意味で「say yes」とした。日本語に直すと「可と肯く」つまり「加藤菜就(かとうなづく)」が誕生で、一件落



二人羽織で奮闘する加藤菜就君

着となった。

親とは、これほど子供に対して愛情を注いでいるものなのである。

「白山」に登るといのは、ワンダラーの果てしない夢である。10月の初旬といのは、笹・柵の濃淡の緑、黄葉、紅葉、深くなっていく空。朝の霜、初雪などなど、色彩豊かな季節だ。冷たい空気を吸いながらあったかーいお茶を飲む。おいしい。至福の時だ。

私は、彼を山へ連れて行ったことはない。しかし、山を薦めた。高校の時だ。近くの低山性の登山であるが、感激していた。そのほとんどに雨が伴っていたが、それでも喜んでた。私も嬉しかった。体力に自信のない私も、彼の言葉を通して、山行きの感動を分かちあうことができた。彼を通して、私は行ったこともない穂高に登ることさえ出来た。彼は足で、私は地図と目で登山していたのだ。今や絶版となった国土地理院発行の集成図「槍・穂」の御蔭だ。

私の高校時代は、そのほとんどが、蝶を追っただの倉ヶ岳行きだった。昼の蝶を追い過ぎたためか、夜の蝶には未だに関心がない。そのせいか下戸でもある。倉ヶ岳へは石川総線に乗り、日御子で下車、月橋から大谷を遡行した。節ちゃんの著書では、この谷筋は通行止めと記されている。大谷は生物の教科書で有名な、プラナリアが棲息している谷だった。よく岩をひっくり返して、その虫のヒンガ目（寄り目）を見て楽しんだものだ。倉ヶ岳、獅子吼、医王山、

白山。これが私の白山へのアプローチの方法であった。さすれば医王山は、私にとって限りなく白山に近い段階の山だ。

さてその医王山へ向けてのパーティー分けが始まる。超人田村氏はさておき、9期白井さんらは何やら理由をつけて下山した。私と、かつてのパートナーであった史三氏は喜んだ。密かに下山を企んでいた11期生5名は、30年を経過した今日、先輩を超えるチャンスをつかんだのだ。すかさず山頂（頂上ではなく、山頂なのだ）を目指すことにした。前日、小山氏の車で下見をしたので、だいたい様子も分かる。青柳氏、森川氏も飛ばす方ではない。仲間も多い。何とかなるだろう。天気は上々。

そうしてわずかな汗を流すだけで、難無く山頂着。バンザイと叫びたかったが、いつも白山へ行っている後輩の手前、医王山程度でバンザイすることはプライドが許さなかった。しかし、白山へ行けるかもしれないという自信が湧いてきた。40周年記念山行の実行委員に感謝。実施を支えてくれた現役に感謝。

山頂で撮った写真には、私のすぐ近くに、例の男の顔があった。前夜の愉快的なキャンプファイヤーで、KUWV初の「涙の対面」をした男、いや、彼であった。そして今度、白山行きの際のボッカ要員として雇用してやるかと見込んでいた男である。まあ、合格させてやるか。「白山」に登るといのは、ワンダラー達の果てしない夢である。その夢に参加できる彼も幸福に相違ない。



親子対面！ 後ろ向きが43期加藤菜就君 右端11期加藤忠好さん

今、上馬氏が送ってくれた白山の写真集を懐かしく眺めている。それにしてもきれいな写真である。特に第3集がきれいだ。腕だけではない、高いカメラを使っているのかしらといろいろ想像している。さぞかし同期長岡氏が悔しがらるだろうと思いつつ。

「白山へいこう。」ドリカムも歌っているではないか。

追。その後、11期生5名は、約25年振りにベルクハイムに行った。ダムからの車道が、ズーッと草に覆われているのには驚いた。歩くこと1時間、倉谷の村跡には家の土台だけが残った。河原も随分様子が変わり、BHへの登り口も草に隠れて見逃しそうであった。対岸の精練所跡の岩を目印に登り口を思い出し、やっとBHに辿り着いた。

中はクモの巣だらけであった。我々の現役時代には、毎週誰かが山小屋を利用して、何となく人気があったが、クモの巣が張っているというのは、どうもわびしい。現役が近々山小屋作業に入るとのことであったので、四角い小屋の中央付近を丸く掃いておいた。記念写真を撮った。BHへの登り口が分かるように丹念に踏跡をつけ、小さなケルンを積んでおいた。今度いつ来れるか分からないBHに別れを告げた。

史三氏の案内で、湯湧温泉近くにある「湯楽」で汗を流してから井上邸へ。杉森氏、向さん、それに12期の大出夫妻が集まったの談笑とご馳走せめ。月曜は井上夫妻、次女の聖子ちゃん(ステキなお嬢さんになっていてビックリ)の出勤にもめげず朝寝。居候達で戸締まりをして、井上邸を辞した。

追。突然の訃報に接し、大出 徹氏のご冥福を祈ります。井上邸で、溪流釣りや山スキー、シルクロードについて愉快に話していた彼の姿が生々しく思い出され、まだ信じられない気持ちです。

またしても編者の独言…。結局「やまざと」の編集長も留年(!)になって…今度から次期の委譲が楽になるよう、編集負担も減らそう、会費という形で皆が負担すればいいんだから…と、原稿集めまでにストップする心づもりでした。そのつもりで、プリントショップ多田のおじさん(といて、年の差いくつ?)に相談してみました。

するとやっぱり、一枚につき打ち出すだけで800円。構成あれこれとなると…とのこと。今回、せっかくの写真。写真でだけでも、懐かしい人と再会してほしい。鮮明になるよう経費をかけたいと思うと、ようするにやっぱり大名編集なんてやっておられん。

でも節子も人の子。いつもいつもマリア様ではないんです。所詮旦那は「馬鹿だ」と云い捨てる口。愚痴をこぼすどころか、ワンゲルのワの字も必要最小限に…と気をつかう。

よって、仕事はたまる、ストレスもたまる…の時に、そう、「豚もおだてりゃ木に登る」と言いますよね。橋正先輩のお手紙を読み返しては元気を出しました。

OB会の円滑な維持…会費と原稿と、そう忘れてはならない「心のこもった言葉」。

超人舟田展へ

13期 橋正 徹

先日はありがとうございました。貴殿をはじめ、多くの人の善意や好意に支えられ、そして甘え、幸せな時間を過ごしました。

それぞれに仕事で精一杯の中で生きているのですが、少なくとも、この5年間の舟田さんのKUWV・OB会における仕事ぶりや今回の世話ぶり。そして目にもとらぬ写真の送付。これはもうはっきり言って超人です。これでは次

に仕事をとって替わる者の出現は絶望的と言わねばならないことを申し述べておかねばなりません。

さて、指示どおり、「余韻醒めやらぬうちに」思うままに感想を綴りました。時間をかけて書いて遅くなるより云々と書いてありましたので、迅速にとのみ書きました。何とぞ添削等、温もりある手と心を加えていただいて、読める文にして下さい。

なお今後とも、健康に十分留意されつつ、他方仕事はポチポチと進められるよう御祈念申し上げます。

白兀の岩に腰掛けると、身体の中をひんやりとした初秋の白い風が吹き抜けていく。間近に見えるキゴ山、戸室山。そしてその向こうに広がる金沢の街並。ここから眺める景色との再会は何年ぶりのことであろうか。

眼下に広がる景色を眺めていると、はるか記憶の彼方に埋もれていて懐かしい出来事がフツフツと脳裏に甦ってくる。ああ、何と懐かしいことだろうか。ああ、何と懐かしい顔だろうか。隣には同期の仲間がいるじゃないか。向こうにはリーダーが立っているじゃないか。後方には新入生が笑っているじゃないか。途切れ途切れの思い出と状況が混ざりあって、夢の中の出来事のようなものである。それでいながら、確かにあの時あの時の一瞬一瞬なのだ。時間の軸が妙にねじれて、重なりあっているだけなのだ。

前山を準備運動がわりに軽く越えようと、急に白兀の山が目前に黒く立ちふさがる。グンと高度をかせぐように足を前に出す。かすかに残っている記憶にピッタリと重なってくる。狭い水路のような登山道だ。今日は肩の荷はないが、あの頃は大きなリュックを背負ったこと。つらかった一歩が甦ってくる。辛さのあまり両手を膝に置いて一呼吸すると、横に咲くシロバナホツツジが力を与えてくれる。ほら、シラヤマギク、アキノキリンソウなども励ましてくれて

いるじゃないか。

暗い林の中で萎える心を元気づけてくれる一輪の花がいい。急に目の前が開けて、眼前に広がる壮大な景色もいい。友がいる。視野いっぱいの空。両手いっぱいの緑の山並。大自然の中にドブプリ身を置いた時に得るものの大きさ、そして豊かさ。

今、中高年の登山がちょっとしたブームだと聞く。よーし自信をもって山に入ろう。(余韻醒めやらぬうちの感想)

青春の心を蘇らせていただいたOB会役員と現役諸君に両手いっぱいの感謝!

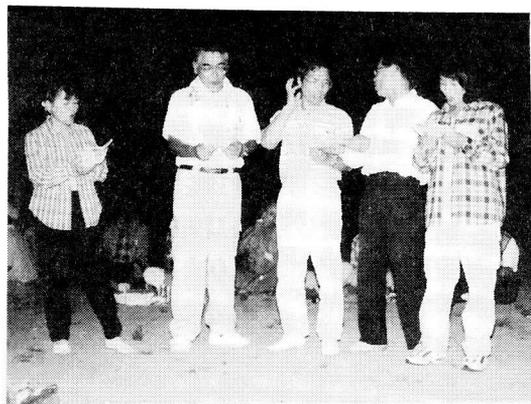
13期 南 梅子

まずはありがとうございます。つきなみな言葉しかできませんが、「ありがとう」の一言です。

日常生活から解放され、一瞬でも学生気分を味わえたことは、何にもまさるリフレッシュの良薬でした。十代からウン十代まで一堂に会した行事はそうざらにあるものではないでしょう。それこそ卒業以来という懐かしい顔ぶれに無事に会えるという嬉しさを実感しました。

我が子と同世代である現役世代を見て、自分の子供からは見えない現代っ子気質を垣間見たようです。

(タイムリーな写真をどうもありがとうございました。)

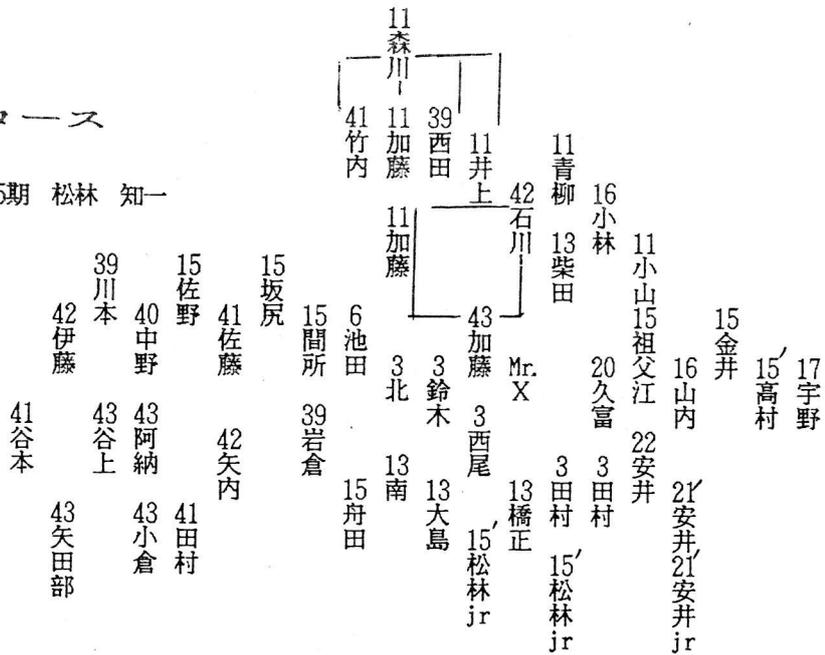


13南 13大島13吉田13橋正13柴田



Aコース

撮影 15期 松林 知一



山頂の静かなひとときを楽しんでいたX氏は、突然老いも若きも集団に囲まれた。それは先住民の排除を非礼とする、紳士淑女の集まりであった。「おじさん、一緒に撮りましょ」13期柴田さんの甘いささやきに、うろたえながらも（抜けるに抜けれず）記念撮影に収まったX氏。「ああ、かあちゃんに叱られる」とつぶやきながら山頂を後にされたのでした。（爆笑）

奥名様

15期会の報告をお送りいただき、ありがとうございました。ところで、今日(10月3日)はみなさん山小屋酒場でしょうか。せっかくのお誘いをいただきながら、今日は会社で原稿を書いています。寂しいですね。

寂しいといえば、大出さんの葬儀にも参列できず、申し訳なく思っています。40周年の総会では元気な顔を見せておられたのに、本当に何ということでしょう。ただただ、心からご冥福をお祈りするばかりです。

やまざと編集長様

総会について一言書けとのご注文。締切を守れず申し訳ありません。さっそく写真をお送りいただいたお礼もまだでした。

子供達のことを紹介します。うちの娘達は、津島さんちのお嬢さんとすっかり仲良くなってしまい、その後文通をしているようです。写真も送ってもらったようで、この場をお借りして津島さんにお礼申し上げます。

それにしても、うちの子供達はワングルの集まりに参加するのを喜びます。不思議ですね。加藤忠好さんのところのように「親子ワングル」など望むべくもありませんが、こんなことを通じて子供達が山や自然を好きになってくれたら嬉しい限りです。

大出さんのご冥福をお祈りしながら、また5年後、元気に再会したいものです。

15期 金井 澄

初秋の医王山での久々のキャンプファイヤー。酔いが廻ってきたのか、夢見心地で何故ここに今自分がいるのかさえ、わからなくなってきた。

伝説の長老へ拝調の栄に浴し、一世代違う若者達の熱狂的な「火縄跳び」や「はだか踊り」はたまた「人間火炎風車」なる驚異的な出し物が次々と続く。若いエネルギーの爆発にただただ啞然。

そして15期の出番となり、しみじみと「白山の尾根」を歌った時、あいつらも来ていた。

高村、石田、そして横井も我々とともに肩を組み、笑顔で参加していた。生きている、私も彼らも。何故か心地よい感動がこみあげてきて、年甲斐もなく涙があふれる夜だった。

昔日、石川門で出会った少年・少女が今や50歳の手前になろうとしていた。私自身にとっても、家庭、仕事、震災と、目まぐるしかった幾年月。時代に流されていく自分の人生、変わっていく自分自身を素直に見つめ直したい。そんな時にクラブの40周年の案内。仕事の段取りはつかか？おそらく徹夜をして0泊2日になるかな？たるんだ体で山登れるか？往復800キロの長い道程大丈夫か？それでもかまへん、参加しようと私を動かす何かがあった。(ほんとは、参加しないと節ちゃんが怖いからと配偶者は言うが…)



17宇野15高村15舟田15間所15坂尻15金井15祖父江15佐野15奥名

おりしも9月12日は、小生の47回目の誕生日でした。山の仲間みんなで祝ってもらった忘れ難い9月12日でした。生きることへのささやかな勇気を与えてくれた9月12日でした。とても語り尽くせない至福の9月12日でした。ありがとうございました。

15期 祖父江 直久

いつものことながら、何らかの圧力がないとペンを執らない自分がイヤになってしまいます。遅れて申し訳ありませんでした。

9月12、13日は久しぶりの金沢、懐かしの医王山を満喫させていただきました。

特に医王山の山歩きは、現役の頃何気なく歩いていたと思う山の道とか、何でも無い植物とか景色が、昔とは違って妙に新鮮で清々しく、とても貴重なものに感じられました。山にも又行ってみようかなと思います。

さて来年は15期会の幹事をやることになり、いささか緊張しております。プランはいろいろあるのですが、実現可能かどうかはまだ検討しておりません。佐野君にアドバイスをもらったりして、決めていこうと思います。そんな緊張感と、他方ではもてなす側の少しウキウキするような感覚もあり、しばらくはこのことで、余り変化のない生活が楽しくなりそうです。

しかし、実行前に腰くだけになってしまうことがよくあるので、みなさんの応援・協力をお願いします。それでは来年は弥富町で会いましょう。

17期 宇野 和子

今年は台風は来ないのかなと思っておりましたが、やっと来始めました。そちらは被害ありませんでしたか？

先日はお忙しい中、準備に走り回っていただき、どうもありがとうございました。

私にとってのワンゲルは、同期の友人との交



昔と変わらぬ風が心地良い。

青春を過ごした金沢を見下ろして。

流、先輩や夫との出会い等を抜きにして語ることはできないのですが、今回は残念ながら夫は仕事のため同行できず、同期生達も不参加ということで、少し寂しい思いをしました。とは言え、5年ぶりに、前回よりちょっと老けた諸先輩方にお会いし、私から見れば学生と同じに見える後輩OBとの触れ合いの機会が得られたのは幸いでした。

現役は、もう我々の子供達の世代で、ワンゲルと出会った頃の自分達を見るようで、感無量でした。

我が家の長女は、小学校2年生までを金沢で過ごしたので、あわよくば金沢大学へ進む道を選んでくれるかと思ったのですが、実力伴わず、又、親がおもうほどには金沢の街への執着もなかったようで、遠く東の地へと今春旅立ちました。そこで出会ったものはワンゲルならぬフリスビー。さて、どんな4年間を過ごすことやら。

私はといえば、今でも山行現役の諸氏には頭が下がるくらい、グウタラ生活を送っております。ほとんど平地しか歩かない生活のため、久しぶりの医王山はものすごくしんどかったです。水太りの身体からは汗が吹き出し、足は次第に重くなって、最後はあえぎあえぎ…でした。荷物がかついで登っていたのが信じられません。でも、登り終えた時の心地良さは、あの頃を思

い出させてくれました。

それにしても、医王山って、あんなに生い茂った山でしたっけ。あの山は我が家のアウトドアライフ始まりの地で、長女が2才8ヶ月、長男が1才2ヶ月の時に訪れましたが、もっとひらけていたような気がしていました。私がリュックを背負い、夫が背負子に長男を入れ、途中で歩かなくなった長女を抱っこして山道をたどった当時は懐かしく思い起こした1日でした。

5年後にも、又元気で皆さんにお会いできるのを楽しみにしております。

18期 津島 直也

先日はOB会御苦勞様でした。また、写真を送っていただき有り難うございます。

あの後白山へ行ってきましたが、二日も晴天に恵まれ、久しぶりに山を楽しめました。

登りの延命水で下の子が腹痛で調子が悪くなり、翌日も朝まで吐いていたので、上の子一人で頂上まで行かせました。背負って下りかと覚悟していたのに、室堂から100m行かぬうちにすっかり元気になり、無事下山できました。高山病かと思っています。

OB会またよろしく願います。



16小林 16山内 16中野18椿川18津島18大西

医王山を登って

23期 名倉 均
瑞紀
雅人

わが家の息子2人(12才と10才)を引き連れ、Bコースに臨みました。

出発までは、「コースの短いAコースにしよう」とぐずぐず言っていた息子2人でしたが、普段勉強もせずに遊び回っている強み(?)か、息を切らせることもなく、トンビ岩を登り切っていました。

結局帰り道では、「まあまあ、良かった(面白かった)」と、それなりに満足していた様子でした。以下、息子に書かせたBコースの感想です。

<兄>

医王山を登って良かったことは、いろいろな人と話げできたことです。

最初の方は、おばさん(舟田さんの事)と話げできたし、大学生のお兄さん(後輩達の事)とも、少し話す事ができ、知っている人が増えました。

それに、頂上に着いた時、よく晴れていたから、お弁当もおいしかったです。

危ないこともありました。トンビ岩を登っている途中で木の枝を拾って、それを持ちながら登っていましたが、邪魔になったので上の方に投げ捨てました。そしたら上で1回転し転がり落ちて、下の方に落ちそうになったけど、弟がその棒をキャッチしてくれたので、助かりました。

(息子達は先頭で登っていました。危うく落石ならぬ落棒をおこす所でした。)

<弟>

もらったお弁当は、リュックの中に入れて登りました。途中の休みでぼくがアリを見ていたら、兄がリュックを棒で叩いてきました。リュックの中にはお父さんの知り合いの人(3期:田村さんの事)のお弁当も一緒に入っていたの

で、つぶれなかったか心配でした。

お昼ご飯前にリュックの中を見てみると、一つは大丈夫で、もう一つは箱が壊れて、中身がリュックの中に散乱していました。

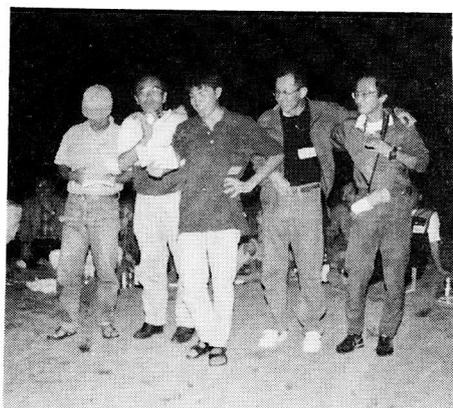
兄に文句を言うと、「はぁー、何のこと?」ととぼけられ、結局ぼくはグチャグチャの弁当を食べる事になりました。

(田村さんには、大丈夫な方の弁当を渡したようです。)

学校の遠足の時よりもずっと距離が長くて、ずっと険しかったけど、何度も休憩したので、それほど疲れませんでした。(30分に1回程度の休憩だったので、それほど何度も休憩したのではないけれど、子供からするとOBに合わせた休み回数は多く感じたようで…)

仕事にかまけて、普段は子供のお相手は嫁さんに任せっぱなしですが、こんな機会に息子達と同じ時間を過ごしつつ、やや親父らしいことができたかと思っています。他に娘1人(2才)がいますが、息子達と同様、医王山でお茶を濁すことはできそうにないので、また新たな機会があれば…と期しています。

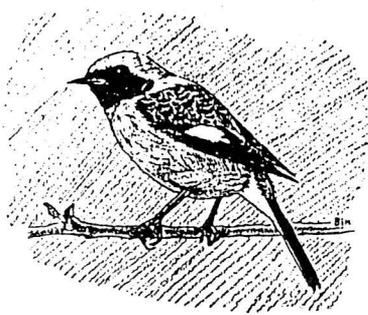
<編者注;「嫁さん」とは、同期23期の雅子さんのことです。>



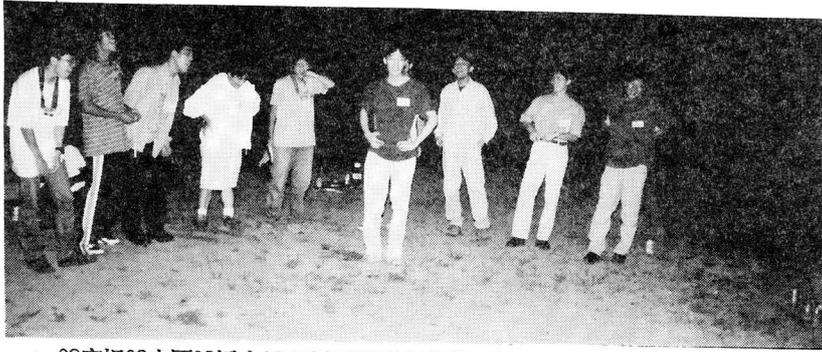
20深田22安井41竹内23鳥越20久富
「寮歌なら歌えます」現役も飛入り



3 田村
 18 椿川
 顧前田 43 村松
 42 笹田
 41 河村
 41 森田
 42 角谷
 18 大西 12 大出
 38 吉原
 41 林
 43 奥野
 42 坂本
 38 三浦
 43 清水
 7 村田
 38 宇根
 43 西脇
 23 名倉
 43 田中
 43 杉村
 29 洪谷
 23 名倉 jr
 38 小林
 42 志賀



B 7 - 8



38宇根38吉原38橋本38西馬37藤牧34松浦36石川29渋谷37柴田

38三浦

KUWV 40周年

38期 西馬 由岳

カレーはうまかった。作ってくれた人、有り難う。懇親会では、1回生の芸に満足した。ファイヤー点火や、石川さんの挨拶も面白かったし、こぼやん(小林)のお約束も、田村さんの飛入りも面白かった。その後の飲み会で、田村さんが何故〇期なのかもお聞きできたし、松浦さんの逸話の数々も、直接本人から聞けて面白かった。山行は疲れた。風邪ひいてたし。

時期的に学会と重なっててちょっと辛かったけど、楽しめました。とにかく働いてくれた現役の方々、有り難う。それと実行委員の方々、ご苦労様でした。

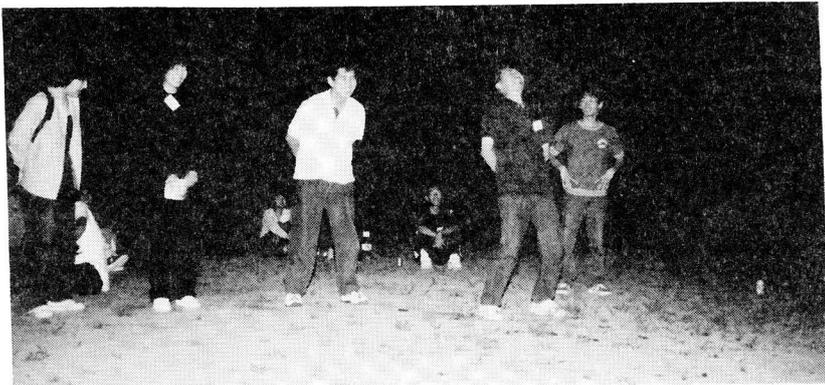
話は変わって、5年前、35周年の時は、私は1年生でした。OBの世話をするため白山に登ることも、楽しみにしていました。荷物が多いため、部室に眠っていたキスリングを引っ張り

出してきて、喜んだりしてました。記念山行は中止になったけれど、厚生年金会館や、城内体育館でのこと、当時初めてお会いして、その後は全く会っていないOB(奥先輩とか飯村さんとか)のこと、我ながらよく覚えているような気がします。

今回、私は若手OBでした。院に残ってて、6回生にあたります。今の3回生とは予定以上に付き合いがあって、3回生以上に対しては、OBというより先輩です。気持ちはほとんど4回生の時のまま、変わっていません。

でも、それも今年まで。院を出て就職して、金沢を離れると、すっかりOBとなってしまうのでしょうか。

5年前は、5年後のことを考えていました。今も、5年後のことを考えてます。同期の連中、身近な先輩後輩、いっぱい集まってくれることを願ってます。私もどうなるかわかりませんけど。



39川本 39岩倉 39西田 39小西 39老田

医王の里、寂しい秋、

林道など十数カ所崩落

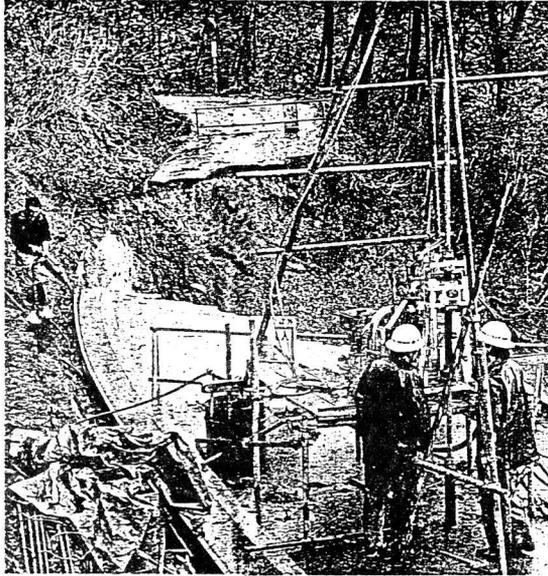
登山行事 相次ぎ中止

先月の台風7号で、金沢市の医王山系の林道や登山道の十数カ所が崩落、登山に危険が生じていることが二十七日までの同市林業整備課などの調べで分かった。市街地から近い医王山は手軽な登山コースとして人気を集めるが、「銀河の里キゴ山」が来月三日に予定していた「親子登山」の中止を打ち出し、各団体も行事の計画変更を余儀なくされている。復旧予定は早くも来年秋の見込みで、二十三日開館の市キゴ山天体観望センターと合わせた「医王の里」へのにぎわいを期待していた関係者は、台風のツメ跡に眉を落としていた。

台風のツメ跡深く

市林業整備課によりますと、医王山一帯の林道の崩落は、国の補助が重要な役割を果たしているが、大規模なものだけでも七カ所以上に上る。金沢市小の道路が路面と約百メートルにまで崩落、道がぶつり

復旧は早くも来年秋



台風7号の影響で陥没した林道
—金沢市小菱池町

と切断されたよう状態になっているのが見つかった。このほか「銀河の里キゴ山」の職員によつて大池平や三蛇ヶ滝、自光山につながる登山路でも崩落やがけ崩れの恐れがあることが確認された。

市は医王の里キャンプ場付近から富山方面につながる林道を全面通行止めとする措置を取ったが、登山道で事故があった場合に緊急車両も通行できなくなり、医王山スポーツセンターや公民館などの各施設は予定していた登山を相次いで中止した。

医王山周辺では、市営スキー場のダイナミックコースが台風7号の豪雨でぐらわれ、今季の開場が立ちたばかり。二十三日にキゴ山少年自然の家とキゴ山天体観望センターを併設して開館した「銀河の里キゴ山」も登山イベントが第一回主催事業だっただけに、職員のショックは大きい。谷内守館長は「登山の参加希望者はとても多かっただけに中止は断腸の思いだ」と話している。

9月23日未明通過した台風7号により、あの医王山にも被害が出ました。写真の崩壊地はしがら頭より上ですが、途中にも小崩壊がいくつかある為、医王の里にて通行止めになっています。